

季節きせつはずれの蝉せみの聲こえ

ある年のこととしです。まだ夏なつにならないというのに蝉せみが出てきて、うるさいほど鳴なきました。

「これこれ、蝉せみよ。おまえがどうして生まれうめたのか、覚えておぼえているか。覚えておぼえないなら、わたしが話はなしてきかせよう。

むかしむかしのこと、崖がけの上うえと、崖がけの下したに、それぞれ村むらがあつた。

崖がけの下したの村むらには、人間にんげんの世よ六ろく代だいを生いき抜ぬいたおばあさんが住すんでいた。

このおばあさんは、さまざまなことをいい当あてることで知しられていたが、あるとき、こんな予言よげんをしたのだ。

『海うみから、おそろしい津波つなみがやつてくる。山やまからも大きな山津波やまつなみがやつてくる。

崖がけの下したに住すむ者ものたちは、大急おおいそぎで移うつり住すむのだ。

災わざわいは、すぐそこまできているぞ!』

人々ひとびとは、おばあさんのいうことを聞きいて、崖がけの上うえの村むらに移うつり住すんだ。

けれども、なぜか、おばあさんは一人ひとり、どうしても、崖がけの下したの村むらから、動うごこうとしないのだつた。

ほどなくして、おばあさんの予言どおり、ひどい津波が押しよせた。

そのため、崖の下の村は、すっかり流されてしまったのだ。

追いかけるように、ひどい山津波もやってた。

安全だと思つた崖の上の村も、やつぱり根こそぎやられてしまったのだ。

助かつたのは、おばあさん一人だつた。

おばあさんは、津波で流されたときに、なんとか屋根にしがみつき、

そのまま、屋根にのつて、海を漂つていた。

ふしぎな力をもつていたのか、喉が渇くことも、飢えることもない。

おばあさんは、死ぬこともなく、夜も昼も、海の上を漂いつづけた。

崖の下の村にも、崖の上の村にも、

村人はもう一人ものこつていない。

おばあさんは、それが悲しくて、悲しくて、泣いた。

夜も昼も、ずうつと泣きつづけていた。

その泣き声は、とてつもなく大きくて、

天にすむカムイの国にも届くほどだつた。



『ああ、うるさくてたまらない』とあるカミイがいった。

『あの音は、なんだ？』

『津波と山津波で失われた村で、一人だけ生き残ったおばあさんが、泣いているのです』

『そうか、それはずいぶんと気の毒なことだ。』

しかし、ああ、のべつ泣かれてはたまらない』

そこで、カミイたちは集まって話しあつた。

『おばあさんは、どうしても人間の国から去りたくないようだ』

『こまつたものだ。なにかいい方法はないものだろうか』

『それならば、あのおばあさんを蝉にしてやろう。』

夏のあいだは、人間の国で、思いきり鳴くがいい。

しかし、冬になったら、カミイの国で静かに暮らしてもらおう』

そんなわけで、蝉よ、おまえはそのおばあさんの生まれ変わりなのだよ。

今年が冬が長くて、なかなか春が来なかつたので、

待ちこがれて、早く出てきてしまったのだろうか、どうか夏まで待つておくれ。

夏がきたら、心ゆくまで鳴くがいい」

と、あるおじいさんが蝉にいいきかせました。すると、蝉はおとなしく鳴きやんだのでした。